

## 書 評

中田元子著『乳母の文化史  
—— 一九世紀イギリス社会に関する一考察』  
(人文書院、2019)



長谷川 雅世

本書の主題は授乳、主役はそれを職業にする乳母 (wet nurse) である。日本にも皇族や貴族や武士階級で乳母制度の長い歴史があり、庶民の間でのもらい乳の習慣が消えたのも大昔ではない。しかし、もし現代に乳母が復活すれば、違和感や否定的感情を抱くだろう。それは、授乳を母親の当然の営みや母子の繋がり象徴と見なし、母乳に栄養価以上の価値を与えているからではないか。本書はイギリスのその授乳に係る研究であり、19世紀初めに問題視され始め世紀末に人工哺育の発達と共に姿を消した乳母雇用をその切り口に使っている。育児書や新聞雑誌や小説といった様々な言説での乳母表象が多角的に分析され、「自然な」営みに思える母親による授乳の「文化性」や「社会性」と、乳母雇用から見える19世紀のイギリス社会が明らかにされる。

序章に続く第一章では、章題である「乳母雇用の背景」が説明される。18世紀の上流階級では、社交の優先や容色の衰えへの懸念などから、生母による授乳は常でなかった。ところが19世紀になると母親向けの育児書などで、時には脅し文句を交えながら母乳哺育が強く勧められ、授乳は自然が定めた母親の義務だと説かれるようになる。中田氏は、この現象をミドルクラスの階級アイデンティティの希求と関連づける。理想と謳われた授乳する母親像が、ミドルクラスと上流階級との差異を際立たせ、前者のアイデンティティ形成に貢献したとする。しかし、勿論、健康上の理由などから母乳哺育を行えない場合もあり、その場合には人工哺育も選択肢になるが、費用や労力や安全性の面で問題があった。だから乳母を雇う金銭的余裕のあるミドルクラス以上の家庭にとって、实际的で安全な第一の

選択肢が乳母雇用だったのだ。このような乳母雇用の背景が、19世紀の人工哺育の実情と共に説明されている。

第二章「乳母雇用の実態と問題」の第一節は、19世紀の乳母雇用の推移を把握する試みで、本書の特質の1つだと思われる。乳母衰退の主原因と同様に、衰退時期についても研究者の間で意見が分かれている。それは、乳母の正確な人数を示す資料がなく、乳母の盛衰は周辺の資料からの推測になるからだ。中田氏は、ゴールデンの『アメリカにおける乳母の社会史』(1996)に倣い、新聞の求職・求人広告数から乳母雇用の推移を明らかにしようとした。具体的には、1821年から1896年までの5年ごとの毎月最初の一週間に『タイムズ』に掲載された乳母の求職・求人数を調査した。その調査結果から、乳母需要は1850年代後半から1860年代前半が最盛期で、その後に急減したとの見解を示す。中田氏自身も認めるように、広告数と乳母雇用数の明確な関連には疑問の余地がある。しかし、推測するしかないこの問題に、1つの具体的な可能性を提示している。また、興味深いことに、中田氏のこの見解は、イギリスの子守研究の古典であるゲイソン＝ハーディの『英国ナニーの盛衰』(1972)の19世紀前半から乳母の衰退が始まったとする見解とは異なっている。さらに、中田氏は、求職広告で既婚と明記しているものよりも未既婚の別を記していないものの方が多いという興味ぶかい指摘をし、これは未婚の母親の求職者が多かったことを暗示していると述べる。

第二章第二節以降では、授乳による道徳性の伝染などの乳母雇用の際の懸念や乳母の子の運命や未婚の乳母の是非といった乳母雇用に纏わる問題が論じられる。ここでは、特に関心を引いた3つの指摘を挙げておきたい。1つ目は、乳児への影響を考えれば乳母の気質伝染よりも病気、特に梅毒感染の方が問題であるはずなのに、育児書などでは前者が重視されたことの指摘で、その理由について、乳児から乳母に感染したと思われる事例も多かった梅毒は、気質伝染とは違って下層階級に「汚染源として責任を負わせる」(67)ことができず、梅毒感染を問題にしすぎると「乳母雇用階級の道徳性が問われることになった」(67-68)からだと言主張する。2つ目は、人工哺育が安全でなかった時代の「乳母雇用が乳母の子の命の犠牲の上に成り立っているという事実」(75)についての指摘で、中田氏は、雇用者側

の認識は概して浅く、「乳母の子どもの運命に思いをいたすことが当然のごとくなされないほど、階級間の分断は截然としていた」(75)と述べる。最後は、「家庭の天使」とは対極の「堕ちた女」である未婚の母親の乳母として雇用の是非に関してで、中田氏は、「未婚の乳母雇用賛成派は時代の規範に挑戦し、反対派は規範を守ろうとして真っ向から対立しているようにみえる」(86)が、「結局両者ともミドルクラスにとっての母親の規範を守ろうとしているという点では同じである」(92)ことを論証し指摘している。

第三章「ドンビー氏の乳母対策」は、ヴィクトリア朝の乳母研究でしばしば扱われるディケンズの小説『ドンビー父子』(1846-48)の考察である。中田氏は、ドンビー家の乳母選びの場面を中心に小説を分析し、この小説が当時の「乳母雇用マニュアル」の側面を持つと述べる。さらに、多くの雇用者が意識していなかった乳母の子の運命について、ディケンズが認識していたと指摘する。ただし、乳母ポリシーには養育を代行する未婚の妹がいる設定にするなどして、問題を巧みに回避し、「道徳的な人々の批判を喚起しないよう」(115)に描いたと言う。だとすれば、本書第二章で論じられた乳母の子の命の危険を認識しながら、自らの階級の利益を優先し問題に正面から取り組まなかった医師たちと同種のエゴイズムが、ディケンズにも見られると言えるだろう。さらに本章では、ドンビー氏の乳母への恐れに注目し、それが下層階級による侵入や汚染への恐怖であり、当時の乳母雇用者の不安を極端な形で表現したものだと言及する。確かに、ドンビー氏の恐怖心や嫌悪感は階級問題と密接な関係にある。しかしそれが同時にジェンダー問題でもあることを、筆者は述べておきたい。「家庭の天使」を男性を去勢するものとして恐れていたドンビー氏にとっては、労働者階級のポリシーがミドルクラスの女性の理想像に倣っていて、そのまねびの象徴が授乳という仕事だったと考えられる。とするなら、ドンビー氏の乳母への恐怖心は、授乳がミドルクラスの理想の女性性の骨子を成していたことを暗示していると言えるのではないだろうか。

第四章「乳母の声」では、乳母側から見た乳母雇用が論じられる。本章前半では、『タイムズ』の求職広告文が分析され、乳母の声を拾い上げる試みがなされる。本書序章を読んだ時、筆者が最も期待したのがこの部分

である。下層階級に属していた乳母が残した日記などの記録がないため、これまでの乳母研究では当事者の乳母自身の声が無かったからだ。そこで中田氏は求職広告文を「乳母たちが記録に残した唯一の言葉」(129)と考え、分析した。だが、中田氏自身も認めるように、広告文は専ら2~3行と短い売り込み文であるため、そこから乳母志願者の暮らしや思いを知るのは困難で、筆者が期待した乳母の赤裸々な声の再現には至っていない。ただし、その一端と言える彼女たちの「乳母雇用の現実に即して生き抜くために選択した振る舞いと知恵」(143)は示されていて、さらに、乳母の子を案ずることのなかった雇用者側とは対照的に、彼女たちが雇用者の望みと不安を十分認識していたことがよく分かった。また、「品行方正な若い未婚女性」(138)という自家撞着的な広告文句は面白い。「品行方正」を乳母側も雇用側も重要条件としながら、乳母の確かかつ迅速な確保という現実が優先され、ミドルクラスの価値観の中核を成すはずのこの言葉が形骸化されている。本章後半では、乳母の研究で『ドンビー父子』と同様に言及されることの多い『エスター・ウォーターズ』(1894)が考察される。この小説が注目されるのは、未婚の乳母が主人公であり「乳母自身が声をあげている」(144)からである。エスターのような女性が子供を預ける場所としてベビー・ファームがあったが、子供の死亡率が高いという問題があった。ここでは、このベビー・ファームを中心に議論が展開され、『エスター・ウォーターズ』が描く乳母自身の経験と思い、特に、乳母の子の犠牲の上に成り立つ乳母雇用への批判が乳母の側から論じられている。

第五章「母親たちの試練」は、乳母雇用のもう一方の当事者である生母たちの声に焦点をあて、授乳と乳母雇用などの乳児育児に関わる問題への彼女たちの対処や考えを明らかにしている。本章では、『家政読本』のビートンとインドで出産したフローラ・アニー・スティールを含む乳母雇用階級の5人の女性に加えて、ミドルクラスの母親の模範であることを期待されたヴィクトリア女王と乳母を雇うことなどできなかった労働者階級の女性たちが取り上げられる。彼女たちの声からは、程度の差はあるものの、概して、育児書などが命じてきた授乳を母親の義務として考えていたことが分かる。また、授乳や育児の大変さや、理想的な母性を発揮するには出産・育児に専念できる金銭的余裕が必要だという当事者ゆえの切実で実際

的な声が紹介されている。

終章「乳母の復活」は、現代に復活した代理授乳とそれに対する否定的反応やイスラム文化圏での乳兄弟の存在に触れている。そして付章では、明治時代のイギリスの育児書の翻訳などを分析し、日本で育児における母親の責任と授乳が重視されるようになったことへの欧米の影響を論じている。

序章で本書の目的が授乳の「文化性」と「社会性」を明らかにすることだと語られた時、筆者はそれらの言葉が意味することを漠然としか理解できていなかった。しかし本書を読んで、母親の「自然な」営みとしての授乳、母性愛の発露としての授乳という概念が時代の文化や社会の影響を受け、創造されたものであることが多面的に理解でき、「文化性」と「社会性」という言葉が腑に落ちた。さらに、19世紀イギリスのミドルクラスを支配していたドメスティック・イデオロギーは表層的には単純であるが、実際には矛盾や両義性に満ち、多様な思いや思惑や利害が混在していて、授乳と乳母雇用はその事実を体現していることが理解できた。授乳と乳母を多様な言説を分析しながら多角的に論じている本書は、有益な乳母研究である。同時に、授乳と乳母という限定的な主題を通して、より広い19世紀イギリスの社会と文化について教えてくれる良書である。

— 高知大学専任講師